

氏名（本籍）	パク 朴	ソン 成	チョル 哲	（大韓民国）
学位の種類	博士（美術）			
学位記番号	博美第127号			
学位授与年月日	平成16年3月25日			
学位論文等題目	作品 集合体シリーズ0401 論文 集合体の本質（The Essence of Assembly）			
論文等審査委員				
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	宮田 亮平
（論文第1副査）	”	助教授	（ ” ）	佐藤 道信
（作品第1副査）	”	教授	（ ” ）	堀口 光彦
（副査）	”	”	（ ” ）	戸津 圭之介
（ ” ）	”	”	（ ” ）	増村 紀一郎
（ ” ）	”	助教授	（ ” ）	篠原 行雄

（論文内容の要旨）

本稿は、芸術の現実から私の工芸概念の拡張と可能性を束ねた論文である。

工芸は「用の美」といわれる表現の分野である。「用」は、「使用」或いは「実用」を、「美」は美しいこと（もの）、いいこと（もの）、りっぱなこと（もの）を意味している。その意味から「用の美」とは、人と共にある物、人の生きる道をより豊かにする道具、実用的な機能のほかに、美しさをもっているという意味に解釈することができる。しかし工芸は、以前と比べ、多くの変化が現れている。

筆者は本稿を通じ、伝統的な技術（鍛金）を保ちながら、純粋な美意識の反映をテーマにして、小さい生命力がある種から発芽を始め、結果として木と森になる過程を表現した。

そして、その象徴的意味を柳宗悦の工芸概念の一つになっていた用途を加えて作品を制作してきた。

人間の集まりが一つの社会になることと同じように、私の作品も、ある小さい要素が集合してモノになっている。また、その集合体と集合体の連結、概念と作品とのつながり、それによる純粋な造形性に対して積極的に研究をつづけている。

第1章 芸術からの工芸

「芸術からの解放」「芸術の自由」「日常生活の内」

「生活造形の分野」「柳宗悦評価の新展開」

現代工芸が作品の中で内的世界の形象化に挑み、芸術からの解放を始め、コンテンポラリー・アートとの境界を越えることは、工芸作品に芸術的な価値を要求する現代社会との同時代的な兆候であると見てもいいだろう。

しかし芸術的価値の他にも、工芸における工芸だけの性質、つまり、日常生活と関連性を持った工芸作品作りも、工芸の守るべき本来の意味として重要視されなければならない。そのため私は、工芸が人間生活と如何に関連性を持っているかを考えながら制作している。

現在の工芸は、従来の伝統的な意識による制限から脱皮し、純粹芸術の一部として解釈されている。芸術からの解放と自由、そしてその機能と役割は益々拡大しており、その表現の方法も広範囲かつ複合的なものになりつつある。

またその一方で、現代社会は技術的な発展をとげており、工業の進歩につれて新しい素材が数多く開発され、先端化されている。そのため、今日の工芸家は多様な素材を自由に扱える技術を習得し、作品に機能的な用途と芸術的な価値を共に与える能力が要求されている。

この章で私は、そのような時代意識を反映し、生活の中から美へと移っていく従来の観点を転換して、純粹な芸術性から実用性を兼ねそなえた工芸作品の概念について、柳宗悦の評価の新展開を通じて幅広く言及した。

## 第2章 工芸 - 集合の出発

「工芸からの発象」「工芸の装飾性」「金属 - 素材の性質」「作品制作 - 鍛金」

第2章では、過去から現在までの制作全般を辿りながら、有機的関係の造形による工芸概念の拡大に関して述べた。私の作品のテーマは「生命」であり、その表現においてフォルムは、鉄棒による線の生成から始まり、線からモノ、そして空間に広がりながら強くなっていく心象を与えるものである。また、それによって創出された空間は、日常性と連係を持ち、さらに拡散するイメージを生む。私の作品は、素材の性質をそのまま利用し、更に私自身の中から引き出した形態性を加え、一つの調和を創造し、それを通してまた新しい客体が生まれる連続性を持っている。

工芸の一分野である鍛金は、私の母国である韓国では、独立した工芸の分野とされていない。金属工芸の中に鍛造という制作技法は存在するものの、日本の鍛金とは技法的にかなり違っている。金属に向かい合う意識と技術、制作後の作品に対する愛情など、韓国の金属工芸と比べ、日本の鍛金の方がより深いものがあるように思われる。

工芸を始めて、「鍛金」は私の中でおのずと重要なテーマになった。小さな要素の組み合わせによる集合体は、工芸作品としてのベースを失わないし、作品を制作するには欠かせないものでもある。

このように、私は、小さな鉄板のパーツが一つずつ付け加えられながら、より大きなフォルムになる集合体の制作を試みている。

## 第3章 集合体

「生命」「発芽-群集」「結晶体」「モノとの関係性」

私が表現するテーマは、生命、発芽-群集、動き、エネルギーなど、普遍的なものからもたらされた概念である。

このようなテーマは、芽や種といった具体的な形を持ってはいるが、幾何学的な立方体の基礎造形とは意識的に対立する構造であるため、複合的な形態として表現されている。私は制作しながら、明らかに対立する二つの要素が融合することを望んでいる。

一つの有機的な構造が出来上がるには、無数の単位体の結合が必要である。私の作品では、木(杉)を利用してモノとモノを連結しており、他の材料(ジュラルミン)も利用している。この制作における種は、全く新しいイメージではないが、有機的な線の流れからマッス(mass)を発見し、また小さい生命であっても、それには莫大な栄養、多様な環境、または他の構成要素が必要であることを観念的に暗示している。

#### 第4章 空間の中、モノ

「間」「空間の中、人間」「集合+連結」「自然の中に見られる集合」

私の作品は、純粹に美的な形態と実用性を同時に追求することに重要なポイントがある。特に、日本で開いた二回の個展を通じて、空間造形をもっとも具体化した。

制作したモノが座れるモノ、何かをそこに置いても構わず空間と一緒にになれるモノ、あるいはテーブルなどのように機能性は持っているが、それを越えた純粹な造形物としての意味を強調している。もちろん、この二つの要素を、明らかな概念で境界線を交錯するいは融合させることが、どれだけ難しいことであるかは知っている。しかし、実験の段階では双方を適切に利用しながら、次第にその境界線を破壊し、融合させていくことは十分に可能であろう。このような考えは現代芸術としての工芸の流れにも一致することと思われる。

それと共に、私は空間という新しい課題に直面している。空間は、私たちと作品が共存する「場」である。その「場」の観点から「集合体」は、日本と韓国の共通の空間認識である「座敷空間」に広がるモノとして、その可能性を研究したいと思っている。

私の作品は座ったり、触ったり、物を置いたりするものでもある。人間と一体化する作品、人が生きることと共に相互作用としての空間と連結し、それを中心に概念が拡大することをめざしている。

#### ま と め

「集合的な人間」

人間は無意識的に、「集合性」を志向する本能を持っている。例えば、人間が集まり、社会を構成することも同じような状況である。

私の作品は、小さい鉄板が一つずつ溶接されて行きながら、より大きな集合体を築いていく単位体の結合のようなモノである。

自然に作られた小さな要素同士の関係と変化への考察は、私がその中で追求している重要なテーマであり、本研究の中でそれをより深めながら、人間と芸術の融合を、造形を通して探り続けるのである。